

山と博物館

第52巻 第5号 2007年5月25日

市立大町山岳博物館

針ノ木岳慎太郎祭50周年 平成19年6月3日(予定)



針ノ木岳 慎太郎祭のとき

撮影 山本携挙

昭和三十三年(一九五八)年七月十三日に第一回が開催されて以来、実行委員会の構成団体ならびに関係各位の尽力により、一年も欠かすことなく行われ、今年五十周年を迎えようとしている。

創設当初は、平林武夫大町山岳会会長の発案により、大町の山岳文化の立役者、百瀬慎太郎(一八九二〜一九四九)の遺徳を偲ぶ「慎太郎十年祭」、「遭難慰霊祭」、「登山者安全祈願祭」の三本柱にて、大沢小屋前でささやかに行われていたという。

しかし二年後の昭和三十五年の第三回(六月二十六日開催)では、主催者が大町山岳会・大町スキークラブ・大町市観光協会の三団体となり、式場も雪溪上に移し、針ノ木岳山頂までの記念登山、雪溪を楽しむ集い(自然散策)、そしてサマースキー大会(第六回まで)さえ行われた。

おりからの登山ブームに乗って、回を重ねるごとに参加者は増加した。昭和四十七年の第十五回(六月十一日開催)では、「過去最高の五百人」と新聞は報じている。

記念登山は蓮華岳山頂まで足を向けた回もあったが、平成四年の第三十五回(六月七日開催)以降は針ノ木峠までの登山となっている。初心者が非常に多い記念登山の安全面に配慮して、昭和四十年前後からは大町登山案内組合や大町山の会も企画、昭和五十四年頃からは北アルプス北部山小屋組合も実行委員会に加わって、「夏山開きの祭典」の意味合いも付加された。

時とともに祭りは移り変わっている。「五十周年記念誌」も発刊される。五十年続けられた慎太郎祭の「きのう・きょう・あした」を考えるよい機会となることを願っている。(大町山岳博物館)

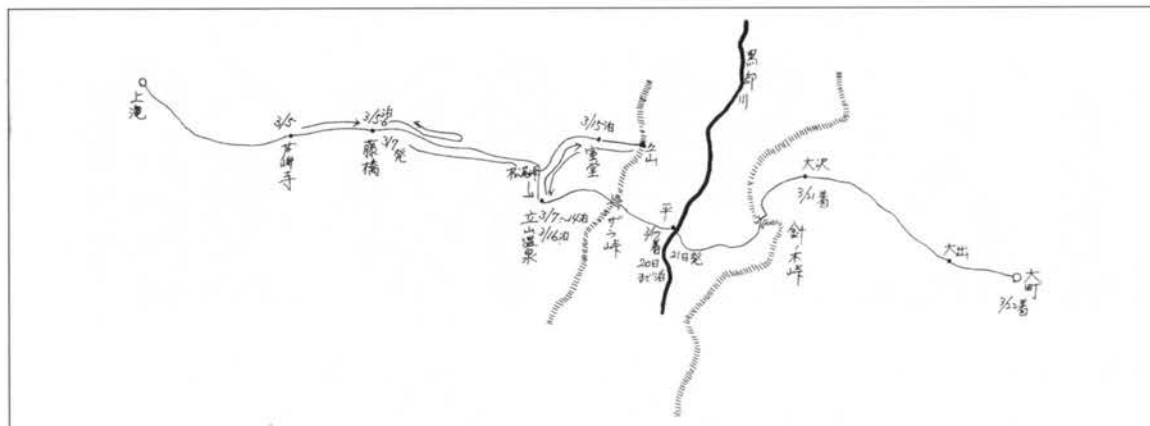


図2 伊藤孝一らのザラ峠・針ノ木峠越え(大正12年3月)行程(ルート)

表3 伊藤孝一らのザラ峠・針ノ木峠越え(大正12年3月)行程

伊藤らの日程は、極めてゆとりを持ったものであったが、休養日をとらなくとも、山中4泊程度は必要であったことがわかる。

芦 峠 寺 藤 橋 (2泊)	3月 5日	発
	5日	着(泊)
立山温泉 (8泊)	6日	立山温泉へ発つも引き返す(泊)
	7日	立山温泉へ再出発
(1泊)	7日	立山温泉着(泊)
	8・9両日	泊、10日 松尾峠往復して泊、11~14日 連泊
平 (4泊)	15日	室堂へ出発(室堂泊)、16日 立山登頂(11時50分)
	16日	立山から帰着して泊
針ノ木峠 大 沢 (1泊)	17日	平へ向けて出発
	17日	平着、18~20日まで平泊
大 町 着	21日	大沢へ向けて発つ
	21日	午後1時55分 峠着
	21日	平より着(泊)
	22日	大町へ発つ
	22日	

三月の五日に芦峠寺を発つてその夜は藤橋泊。翌六日、立山温

泉へ向かいますが、荒天の為に断念して引き返り、藤橋に泊ります。七日立山温泉について泊まり。八、九両日ここに停滞し、十日は松尾峠まで往復して帰り、十四日まで連泊します。十五日に室堂へ向かいこの日は室堂泊。十六日一時五〇分、立山登頂、直ちに立山温泉へ下山して泊り。十七日、立山温泉を発ちザラ峠を越えて平の小屋に着きます。平には二十日まで泊まりました。二十一日黒部川を渡って針ノ木谷を上り、午後一時五五分、針ノ木峠に立ちました。その日は大沢小屋に泊まって、翌二十二日、大町へ着きました。実に十七日間及び大登山でした。

この時の様子は、伊藤が撮影させたフィルムに記録されています。それが昭和五十五年に赤沼家の土蔵から見つかり、平成十六年、伊藤孝一没後五十周年を記念して山岳映像作家の羽田栄治氏らの手によって編集され、大町山岳博物館で公開されて筆者も見ることができました。

伊藤らは雄山に登頂するなどしたため、十七日間という期間をかけたかったが、天候に恵まれかつ休養日を取らなかつたとしても、山中三、四泊程度は必要だったと思われれます。それにしても万全の準備をして山小屋に泊まつてのことです。成政一行が太閤記の言う様に百人あまりの隊だったとして、山小屋もない山中でどうやって過ごすことができたのでしょうか。食料は、寝具はどうしたのか。しかも伊藤や百瀬らは、二月の針ノ木雪渓は危険に過ぎて登攀を断念し、三月に入ってから二十日もたつてから漸く峠を越えることができたのです。

黒部川は、彼らは鉄索に乗って渡っています。フィルムを見る限り、あの水量の多い激

ザラ・針ノ木越えの検証(三)

小林 茂 喜

五 雪中の立山を越えた登山家達

近代になってからの事ですが、積雪期のアルプスを越えた登山家達がいいます。

名古屋の伊藤孝一、大町の百瀬慎太郎、有明の赤沼千尋の三人は、大正十二年の二月から三月にかけて立山・針ノ木越えを実行しました。

伊藤孝一は名古屋の資産家にして登山家。百瀬は言わずと知れた大町・対山館の主人で、後に針ノ木小屋や大沢小屋をつくることになり、赤沼もまた燕山荘の経営者として知られる登山家でした。

これは大規模な撮影隊を組織し、映画を撮影しながらの立山・黒部越えでした。これを成功させる為に、伊藤は容易周到な計画を立てました。前年の夏までに真川などに三棟の山小屋を建設し、安全な登山に必要なすべてのものをストックしたのです。小屋は生活居住空間として快適に利用できる様入念に設計され建てられたといわれます。

こうして伊藤達は、大正十二年一月に麓川の大沢出合いまで偵察した後、二月二十日、まず大町から針ノ木越えに挑戦しました。しかし連日の降雪に阻まれて一週間を退却を余儀なくされ、富山側から再挑戦することになります。その行程は次のようなものでした。

三月の五日に芦峠寺を発つてその夜は藤橋泊。翌六日、立山温泉へ向かいますが、荒天の為に断念して引き返り、藤橋に泊ります。七日立山温泉について泊まり。八、九両日ここに停滞し、十日は松尾峠まで往復して帰り、十四日まで連泊します。十五日に室堂へ向かいこの日は室堂泊。十六日一時五〇分、立山登頂、直ちに立山温泉へ下山して泊り。十七日、立山温泉を発ちザラ峠を越えて平の小屋に着きます。平には二十日まで泊まりました。二十一日黒部川を渡って針ノ木谷を上り、午後一時五五分、針ノ木峠に立ちました。その日は大沢小屋に泊まって、翌二十二日、大町へ着きました。実に十七日間及び大登山でした。

流では、鉄索のような設備がなければとても渡ることはできないだろうと思います。夏期の内に橋を架けるなどのことが可能であれば、それを利用することはできるでしょうが、佐々成政はそれをどのようにクリアしたのでしょうか。彫刻家の石井鶴三は、昭和の初めにやはりこの平の渡しを籠で渡っています。水が少ないときには少し上流で渡渉することもできるという話を聞いて記しています。時期や場合によっては渡渉も可能だったのでしょうか。

研究者の中には、成政は芦峠の獵師や仲語など冬山にも慣れた屈強のものどもを案内に立てて越えたと考えられるから、彼らの知恵と経験によって難所を切りぬけることができただのと言う人々もいます。しかしこうした厳冬の山中では、大部隊の方がより多くの危険を伴うことは八甲田山の例を引くまでもありません。冬の立山や黒部などは、経験深い少数の獵師たちでさえ慎重に、身軽にどうとでも動ける状態で行動して初めて、わずかな活動が可能になる山岳なのです。それでさえ、小林喜作が棒小屋沢の雪崩で遭難したように、命を失う危険と隣り合わせであることは言うまでもありません。

六 越中と遠州

このように見てくると、厳冬のザラ・針ノ木越えは、不可能のように思えます。では、成政らは、ザラ峠針ノ木峠を越えなかったのでしょうか。越えなかったとすれば、どのようにして浜松へ至ったのでしょうか。もし越えてはいないとしたら、なぜ越えたという伝承が生まれたのでしょうか。この点について考えてみたいと思います。

成政の浜松訪問について、先に紹介した「家忠日記」の中に、次の様に記されています。

二十五日（天正十二年十二月）丁卯、

越中佐々蔵助濱松へこし候て、吉良二信雄様御／鷹野二御座候御禮申候、
□むかいにてふる舞候

二十五日、越中の佐々蔵助が浜松へやって来た。吉良で信雄が鷹狩りをしてお礼を言った。ということでしょう。この文面を素直に読めば、お礼を言ったのは成政ということになりそうですが、むしろ信雄が成政の協力に礼を言うところでしょう。

「むかいにて」はその前が不明なのでよく意味が取れませんが、誰かが迎えて蔵助を歓迎したということでしょう。つまり、浜松へやって来た成政は、吉良で鷹狩りをしていた信雄を訪問し、信雄がそれを歓迎したのです。

松平家忠は家康の側近で、日記は天正五年から文禄三年まで記されています。側近として知り得た情報、自らの行動、日常生活の事実を極めて簡潔に記したもので、同時代の史料として価値は高いということです。日記ですらから作為がないとは言いきれませんが、まずこれを信じることにします。すると二十五日という日付は動かないことになりました。やはり同時代に近い史料である当代記は、次のように記しています。

同一二月、佐々陸奥守濱松江下、于時信雄吉良鷹野し玉ふ間、於彼地佐々有対面、さて應而帰国、上下信州を通

日付を記してないところを見ると日付について正確なところを知らなかったのでしょうか。なぜならば、日付が判る部分は日付を記してあるからです。そう考えると、「上下信州を通」という記述が、そういう情報を当代記の編著者が得たであろうという意味合いにおいて、信憑性を増すことになりました。「当代記」はこの記述の前段で次の様に記しています。

去十月佐々陸奥守一越中主、信長取立之人也。信雄家康江令一味、能登江討入之由有告然共終已為以後間無其詮

成政が陸奥守を拝任したのは、前年、天正十一年の十二月末です。この文面は、去る十月に佐々成政から能登へ討ち入ったという報告があったが、既にことが終わったあとで、どうしようもないことだったということでしょう。

成政が前田との戦端を開いたのはこの年九月でした。前田方の忍びであつた富山城の茶坊主義頼が、成政が家康と連絡をとり合い密議を重ねたことを前田方に通報し、前田方が越中境の朝日山に砦を築いたことによるといわれます。様々な資料から前後関係を考えると、成政の戦略が効を奏しないうちに、状況が不利な方へ流れたという風に読み取れます。心情的にも大儀の上からも、成政は信雄・家康方につく方が順当な選択でした。前田との婚姻を進めていたのは、前田との結び付きを強めることによって、前田が秀吉べつたりになることを防ぎ、同時に前田を秀吉との緩衝とする戦略であつたのではないかと考えられます。家康とのパイプを太くしておくことも同時に重要でした。家康が信長の盟友で

あつたという関係からしても、軍事力の上からも、秀吉に対抗し得るのはまず家康であつたからです。

では成政は、どのような方法によって家康と連絡を取っていたのでしょうか。次の文書を見てみましょう。

なほなほ、別して御精を入れられ候事、先年のちなみかと思し召され候、以上。急度申し入れ候。よつて其の元において越中往復通用の衆、別して馳走なされ候の由、其の聞こえ候。お取り合わせ申し候の処、一段御悦喜どもに候。兩人より能々申し越すべき候由、仰せ出され候。尚以て向後の儀、通用これある衆、ご馳走もつとも候。 恐々謹言。

十月十七日

大久保新十郎

忠隣(花押)

本多弥八郎

新屋但馬守殿

御宿所

(榛葉幹生氏文書)

大久保忠隣、本多正信は共に家康の家来であり、武田氏滅亡後に甲斐の国の経営を任された奉行ですから、この文書は天正十二年十月のものとしてされています。「先年のちなみ」というのは、家康が信長滅亡後、信濃進出を図つて軍事的政治的にはたらきかけを行った際、新屋但馬守と何らかの接触があつたものと推測されます。

いずれにせよ、新屋(榛葉)但馬は、「越中往復通用の衆」に対して特別の便宜を図つたのです。「越中往復」であるから、これは

ザラ峠、針ノ木峠を越えたものと解するのが一番自然でしょう。

但し、この文書がそのまま成政の針ノ木越えを証明するものということにはなりません。十月十七日付けの手紙ですから、越えたのはそれ以前です。今後も越中と信濃を行き来する者に対して変わらぬ便宜を図ってくれる様要望しているのですから、これ以前に何度かにわたって成政と家康は使者を行き来させ、そのうちの一つがこの十月十七日のものであったと理解するのが妥当でしょう。

この時とあわせ、成政の使いは少なくとも二度はザラ峠、針ノ木峠を越えています。

天正十二年三月末、成政の側近であり一族でもある佐々平左衛門と前野小兵衛ら五名が尾州前野村の前野（小坂）家を訪れています。五名は隠密の行動であったので、「山中越中より罷越し難儀の様体衣類破損甚しき由」と武功夜話「千代女書留」には記されています。旧暦三月末は新暦で四月末、ちょうど雪も落ちて、雪崩の心配も殆どなくなる頃です。そして峠からの沢筋の下りは、「尻制動」などで滑って下りることが可能ですから、短時日のうちに越中から尾州を往復できます。一行五人ならば、食料の携行も簡便にして、樹林帯の中などでビバークもし易い。

私は若い頃から針ノ木峠を度々往復しています。四月下旬にスキーで下ったこともあり。平成十七年六月にも針ノ木峠を麓から往復しました。峠から扇沢への下りは、大沢小屋の下方あたりまで、わずかに二六〇二七分を要したのみでした。夏道ならば、二時間はゆつかりかかる道筋です。登りも最短コースを直登できるから時間が節約できます。

天正十二年三月といえば、信雄と結んだ家

康が清洲城に入った時であり、これが「小牧・長久手の戦い」の端緒となりました。記録には現れていませんが、小兵衛らは、当然家康と会ったに違いありません。私はこの時の事が、甫庵の太閤記に採られた「さらさら越え」であったと考えます。甫庵の太閤記は、拳兵の前に、成政が家康と語らったことを記しているからです。実際に来たのは成政の腹心だけでしたが、佐々平左衛門も前野小兵衛も、成政が最も信頼する身内でしたから、成政自身が行ったのと同じ価値を持っていたことでしょう。

さて、以上の様に考えてみると、成政が厳冬期にザラ峠針ノ木峠を越えたということは、益々疑わしくなってきました。なぜならば、春夏にそれぞれザラ峠、針ノ木峠を越えた成政の家臣達は、高山を越えることの大変さと危険を、身をもって知ったに違いないからです。当然、案内の者をつけて越えたでしょうが、春先なら雪崩の「でぶり」を見てその恐ろしさを想像したでしょうし、夏なら黒部川の激流に出会って、これを真冬に越すことの危険と大変さを悟ったことでしょう。山中三泊あるいは四泊した際に案内の者達が自分の体験を様々に語ったであろうことも想像に難くありません。そのような状況の中で、果たして厳冬期の立山を越えるという危険を選ぶのでしょうか。

成政がもしザラ峠を越えなかったとすれば、天正十二年の十二月、どのようにして浜松に至り、また越中に帰ったのでしょうか。その手がかりは「武功夜話」の中にあると私は考えます。

（つづく）
（信濃史学会会員）

第五十回 針ノ木岳慎太郎祭

参加募集要項（抜粋）

山恋うる友よ集い来たれ

そして山の祝いを謳歌しよう！

○とき 平成十九年六月三日（日）

（雨天の場合は十日（日））

○行き 大町駅前 午前七時十分発

扇沢行き定期バス（有料）

○受付 扇沢駅前広場

（午前七時三十分～八時）

○祭典 午前九時三十分～

針ノ木大雪溪において挙行

○記念登山 針ノ木峠

午後四時予定 解散

○閉会式

一人 二千元

（保険料・記念バッヂ・記念誌
記念てぬぐい・山の歌集
おしるこ 含む）

○特典 その他

▼慎太郎祭の参加者は、特別に針ノ木岳登山口付近までバスでお送りします。

▼下山集合地には、あたたかいおしるこや記念スタンプが用意してあります。

▼登山する人はパーティーを編成し、リーダーの指示に従って行動します。

▼登山しない方のために、高山植物観察などの班を設け、大雪溪周辺で小鳥の声を聞いたり、緑の中に浸り森林浴を楽しみながら過ごします。

▼雪などの状況によつては計画の一部を変更することがあります。

○主催

針ノ木岳慎太郎祭実行委員会

〔構成団体〕

大町山岳会

大町登山案内人組合

大町山の会

北アルプス北部山小屋組合

大町山岳博物館

大町市観光協会

○協力

大町市

大町商工会議所

中信森林管理署

長野県山岳総合センター

大町市教育委員会

JR信濃大町駅

川中島バス（株）

（株）関電アメニックス

北アルプス交通事業部

松本電鉄（株）

アルプス第一交通（株）

信州名鉄交通（株）

○問い合わせ

大町市観光協会

電話 0261-22-0190

おおよそ、大山祇の神のゆるしをうけまくと
ぬき奉る山に入る日は
— 慎太郎 —

山と博物館 第52巻 第5号

発行 千 二〇〇七年五月二十五日発行
388 長野県大町市大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館

TEL 0261-22-0190

FAX 0261-22-0191

E-mail: sanpak@city.omachi.nagano.jp

URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpak/

印刷 刷 奥村印刷

定価 年額 一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七―一三三九三